





陽だまりが気持ち良い冬の朝。静岡県伊豆の国市の高台にある住宅地、千代田地区の公園に少くも人が集まってくる。「そっち持って」「もう少し前に出よう」「テーブルを並べ、桜の木にタープを張り、手作りのベンチを水洗いしたり、気兼ねなく言葉を交わしながら準備を進めていく。

千代田区見守り隊（代表・横山四郎さん）が開催する「笑顔の食材市」を訪れた。毎週火曜1時から行われる地域に欠かせない取り組みだ。

商品を載せた車が到着すると、野菜、惣菜、パン、お豆腐、お寿司、甘いものなどテーブルにずらりと並べられる。これらの商品は食材市の趣旨に賛同し、地場産品を扱う市内の事業者の協力を得て出品してもらったもの。また、食材市の商品の運搬と販売業務については、市内のB型就労支援事業所「もくせい苑」が担当する。

食材市の商品の運搬については、見守り隊が市内の事業所や商店を回って商品を集めて運搬するのは人的・費用面からも難しい。そこで、もくせい苑に相談したところ、運搬は施設のワゴン車を使い、販売は通所者の屋外就労の一環として担ってもらえることになった。

11時5分前、食材市の開始を知らせる放送が地区に流れると、住民が次々と公園をめざし歩いてくる。来客は高齢者が多いこともあり、出品者は野菜や惣菜を手取りやすい量にパックし、二丁ズに対応した工夫をしている。買い物物が重くなった人には見守り隊のメンバーが家まで運ぶ様子も見られた。そんな折、千代田区に引越して間もないという赤ちゃんを抱えた母親が来場すると、その場に居合わせた人が温かく声をかけては笑顔に包まれる。

「千代田区見守り隊」は、地区の小学生的の登下校の見守りをはじめ、平成22年に発足。以来続けている登下校の見守り活動は、メンバーが交代で月2回程度参加し、下校時には20分以上

離れた学区の小学校まで迎えに行き、毎日子どもたちと一緒に歩いて帰る。千代田区は高台にあるので、帰り道は上り坂になるのだが、メンバーは散歩がてらに健康に良いと苦にならないそうだ。「見守りのときはいつも、大きな絆創膏を持参して子どものケガに対応できるようにしている」とメンバーの一人は話す。子どもたちからは「おじさんのポケットはドラえもんのようなだね」と信頼されていると照れる。

千代田区は近年高齢化率が49%台に上り、バス路線も減便となるなど、買い物困難の問題が切実な地域課題となってきた。そこで買い物支援や地域の見守りのため、平成29年から「笑顔の食材市」を開始した。

また、「買い物支援移動サービス」も令和2年からはじめたところだ。地元の社会福祉法人の車を借りて、市内のスーパーまで見守り隊が同行して荷物を持ちたり、乗客の把握などもしている。自分たちの課題に対応する活動を徐々にバージョンアップさせているようだ。

昨年度からは「見守り隊だより」を作成し千代田地区の全戸に配布している。食材市も買い物支援も継続し、閉じこもりがちの人が外に出てくるきっかけづくりをしたいと願う。公園を周回できる散歩コースもメンバーの手作業で整備中だ。

これだけの取り組みができる秘訣を聞いてみると、代表の横山さんは「千代田区は自分たちがやれることを楽しくやって、自分たちが過ごしやすい環境にしたい」そんな意識を持つ人が多いのではないかと話してくれた。

千代田公園に置かれた手作りのベンチについても触れておきたい。伊豆の国市では、平成28年よりベンチを設置して住民の交流を生み出す「ベンチプロジェクト」を実施している。

このプロジェクトは、ベンチの製作側・設置側・見守り側の



三つの役割がある。例えばある商店からベンチの設置希望が市に寄せられれば製作者を募る。ベンチの設置の際には、製作者が地域住民から希望を伺い、座りやすいような設計に工夫を凝らしている。中でも、伊豆の国市建設業協会（会長・土屋龍太郎さん）はベンチの製作側の強力な推進役として活躍する。

ベンチプロジェクトのきっかけは、土屋建設株式会社が平成23年より農業参入し、その後、事業として行う自社の野菜直売所の前にベンチを設置したところ、自然と地域の高齢者が集まり交流の場になっている光景が見られた。もしかすると、ベンチが地域コミュニティのツールになるかもしれないと考え、市全体に広げていく運びになったものだ。

土屋龍太郎会長は「本業の中だけではない『自分たちのできること』を業界の多くの仲間たちと、地域に向けて展開してきている。ベンチ製作の際は住民と会話を交わしながら設計し、そこに暮らす住民のめざす、人とのつながりや、誰かのための生きがい、づくりに参画し、地域力向上へのあとおしをしている。住民が心豊かに暮らすために、そして地域を元気にすることが建設業の使命だという意識で、これからも地域を支えていきたい」と話す。

今回訪れた「笑顔の食材市」と「ベンチプロジェクト」はどちらも、活動に携わる人たちの間で、この地域をどうしていきたいかを共有して、自然体で協力関係ができてるのが印象的だった。

食材市の活動やベンチプロジェクトの活動をサポートし、市役所の立場からコーディネートする、伊豆の国市役所の古野さんと野口さんは「ちょっとしたお互いの手伸ばし」を伊豆の国市のまちづくりの原動力として挙げる。伊豆の国市では一人一人が主役となり無理なく楽しく生きがいを持って活躍できるコミュニティが育まれていると思う。